

「黄泉の縁を巡る 紹介文」

岡和田晃

この「黄泉の縁を巡る」は、片理誠の手になる『エクリップス・フェイズ』のシェアードワールド小説だ。大作であるために、「SF Prologue Wave」上では、連載という形で紹介していく。

『エクリップス・フェイズ』には大別してスペースオペラの側面とサイバーパンク的な側面があるが、本作は『エクリップス・フェイズ』のスペースオペラの醍醐味を存分に堪能させてくれる痛快作だ。何はともあれ、まずは騙されたと思って本文を読んでみてほしい。迫力ある空中戦から始まる怒涛の展開に、あなたはきっと引きこまれて止まないはずだ。

主人公のジョニイ・スパイス船長の設定は『エクリップス・フェイズ』のルールシステムに則って作成されたものである。その後、実際に片理誠はジョニイ船長を使って『エクリップス・フェイズ』のゲーム・プレイに参加している。その時のプレイしたゲームのストーリーと「黄泉の縁を巡る」との間に直接の関係はないものの、本作品はローリングゲームのエッセンスに満ちたものとなっており、細部の描写も経験者ならではの

の躍動感に溢れている。

なお、本小説には既存の設定を参考にしながら、作者が独自に想像を膨らませた部分がある（特に“大破壊”の描写や空中戦など）。あらかじめご了承ください。

片理誠は、第5回日本SF新人賞の佳作を受賞した『終末の海』（徳間書店）でデビューした後、ミステリやSFなど様々な要素を含んだエピック・ファンタジー『屍竜戦記』シリーズ（徳間書店）、量子論と多世界解釈をまさしくゲーム的に表現した本格SF『エンドレス・ガーデン』（早川書房）、近未来の東京で生体兵器とのハードなアクションで魅せる『Type: Steely』（幻冬舎）と、高水準の長篇を次々と発表している。領域横断的な作風が片理誠の特徴だが、本作は初の本格宇宙冒険SFということもあり、ファンにとっても要注目の逸品だ。

本作品のアートワークを担当するのは、イラストレーターの小珠泰之介。「コミックFantasy」誌（偕成社）のファンタジーコミック大賞佳作入選経験もある描き手だが、長年にわたるSF読者でもあり、イメージ喚起力に優れたアートワークには独特のセンス・オブ・ワンダーがある。海外のイラストレーションとはまた違った味わいを

堪能していただきたい。